

位置と環境

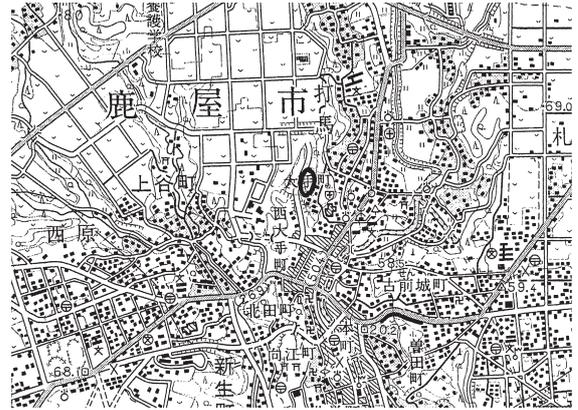
遺跡は高隈山系の裾野から広がる広大なシラス台地の末端に位置し、市街地の中心から北西へ約1km離れたところにある。調査区の東側には高隈山系に源を発する肝属川が蛇行しながら南流し、度重なる氾濫と浸食作用によって変化に富んだ地形を作り出し、その周辺には豊かな水田が開けている。調査区は標高62~65mの北側から南側へ緩やかに傾斜する位置にあり、南北約250m・東西約80mを測る典型的な舌状台地となっている。

調査の経緯

城山ハイランド事業計画に伴い、トーハク物産株式会社より遺跡の有無について照会を受けた。その結果、埋蔵文化財包蔵地であることが明らかになった。鹿屋市教育委員会は、事業に伴い事業主から委託を受け昭和62年確認調査(約8,000㎡)を実施した。その後、この造成工事計画書と確認調査の結果を十分に踏まえた上で、消滅すると予想される約2,100㎡につき同年本調査を実施した。

遺構と遺物

昭和62年実施した確認調査では、弥生時代、縄文時代早期・前期の土器片が発見され、遺構は、土坑1基・集石7基等が確認されている。遺構の一つは、近世墓でアカホヤ火山灰層面で検出され、形態は長径1.5m・深さ0.6mの楕円形となる。遺物としては、7枚の寛永通宝と鉄片が発見された。

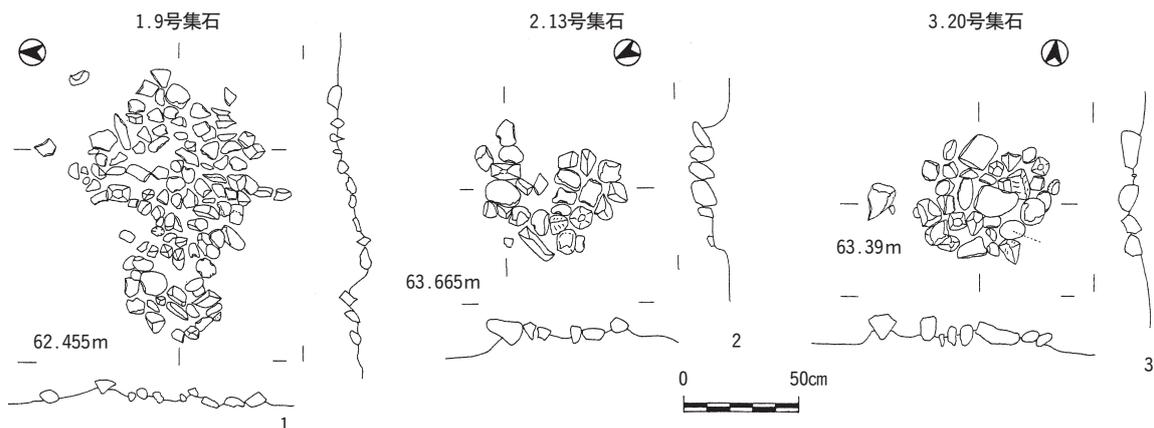


第1図 打馬平原遺跡の位置

縄文時代早期の遺物は、前平式・石坂式・塞ノ神式等の土器、環状石斧(第3図11)・磨石・石皿・石鏃等の石器が出土した。

昭和62年の本調査では、アカホヤ火山灰層の下から縄文時代早期の遺物や遺構が発見された。

縄文時代早期の遺構は、集石22基・近世墓1基が確認された。集石の形態には長軸方向が50~150cmを測るが、80cm前後のものが多く、短軸方向は30~120cmを測り、60cm前後となるものが多い。礫数は少ないもので21個、多いもので110個を数える。集石の状況は、同一の小角礫の集合したもの(第2図1)、散乱状態でまとまりに欠けたもの(第2図2)、大型の礫を中心に配置し小形の礫で取り囲んでいるもの(第2図3)に大まかに分類できる。これらの礫片は平面的に配置され、下部施設の存在するような特殊な状況は見られなかった。近世墓は上位層が崩壊されているため、発見されたときは直径90cmで、遺物包含層を深さ20cm掘り込む形で発見さ



第2図 集石

れた。出土遺物には墨書土器2点と寛永通宝がある。

縄文時代早期の土器は、前平式土器（第3図1）・石坂式土器（第3図2）・下剝峯式類似の土器（第3図3）等の円筒形貝殻文土器と平椀式土器（第3図4）・塞ノ神式土器（第3図5）等が出土している。遺物は複合した形で限定されたアカホヤ層の下から検出された。土器は器形や文様が酷似し地域間の交流を思わせるもの、角筒土器（第3図6）、突起部が口縁部下に見られ緩やかな稜線を持つもの（第3図7）、石坂式土器等に見られる把手状の隆起部（第3図8）の位置や形態の異なるもの等が発見されている。このほかに文様・文様構成等において類例の少ない特徴的な土器片が出土しており、今後資料が増加する中で解明されなければならない問題を残すこととなった。ほかに楕円・山形・網目等を有する押型文土器（第3図9）、縄文前期の曾畑式土器（第3図10）の文様に特徴を見出せる遺物も発見されている。

石器は、縄文時代早期の押型文土器に共伴することが多い異形石器（局部磨製石器）（第3図12）や

石皿・磨石・槌石・砥石・局部磨製石斧・石錘・石鏃・ピエスエスキーユ（第3図13）・装身具（第3図14）等が出土している。

特徴

数多くの文様・文様構成を有する土器片が発見され、それぞれ土器そのものの時間的な位置付けなど検討する上で今後の課題となる資料の発見があった。

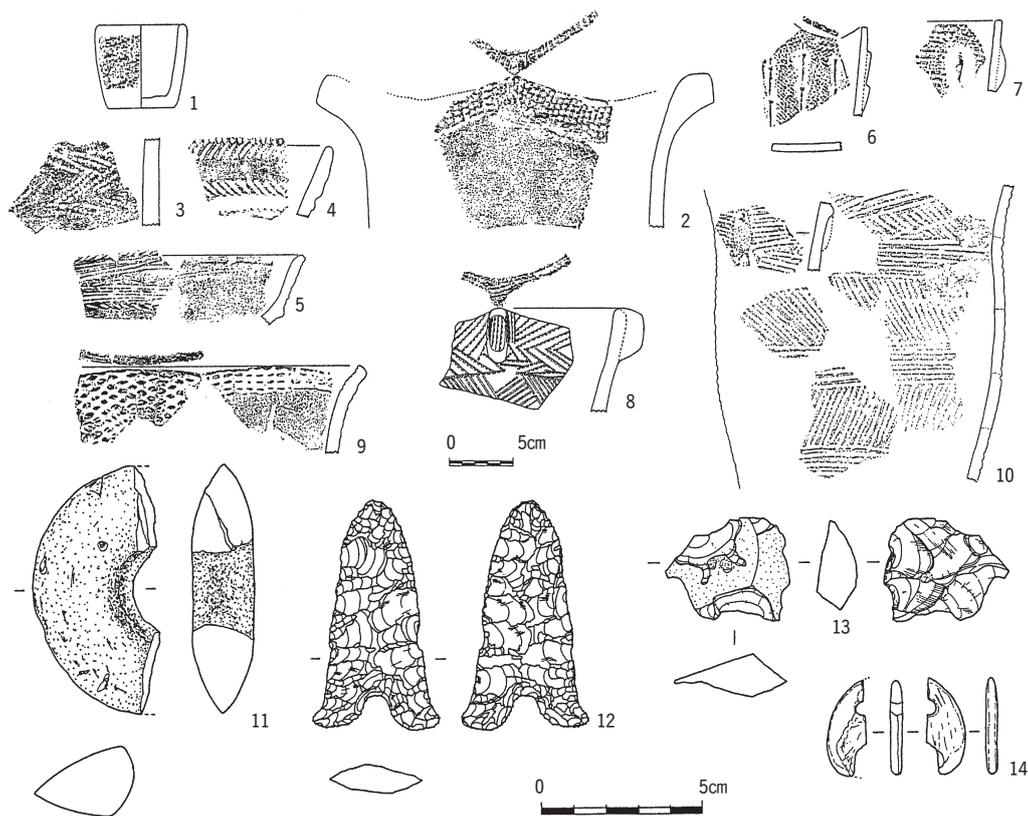
資料の所在

出土遺物は、鹿屋市教育委員会に保管されている。

参考文献

鹿屋市教育委員会1988「打馬平原遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』8

(山口俊博)



第3図 出土遺物